

月あかりの下で

ある定時制高校の記録

「もの」が潤沢にある半面、「こころ」の豊かさが乏しくなっていると言われている昨今。教育の現場でも多くの問題があり、多くの学生にとって心を開くことのできる学校や先生に出会うことが難しくなってきた。

そんななか『ルーキーズ』のように熱く、『金八先生』のように人情味に溢れ、生徒が感情をぶつけ合うことのできる学校が確かにあった。

埼玉県立浦和商业高等学校定時制課程。通称「浦商」。2002年の入学から2006年の卒業までをカメラで追い、担任の平野先生、生徒のサチコ・ナオミ・マリらの姿から2008年に続廃合をもって幕を閉じた同校とはどんな学校だったのか？を描いた映画『月あかりの下で』。今回は撮影・編集を行い、同校を4年間追った太田直子監督に話を聞いた。

Q 浦商はどういう学校でしたか？

平野先生が言っていた「嫌いででも排除しない。嫌いても良いから存在を認める。嫌いても良いからそういう人間との付き合い方を覚える」それは人が社会で生きていく上で大切なことだと思えます。そういった根源的なところを生徒に教えている学校でした。

本来は学校ではなく地域の人との関係の中で覚えていくものかもしれませんが、今の若者や特にあの学校に来る生徒は不登校などの子も多く関係を築くのが上手くないのであえて教えています。あの学校ですごく上等な人間教育を受けている。

きちんと一人の人間として生徒を育てている。そんな印象があります。

必要なのは、学校に継続する習慣のない生徒に学校は「楽しい場所」「ここに来たら何か変わるかもしれない」という期待感を持つてもらうこと。サチコが2年生の時に保健室で「学校に来るとイライラするけど、学校に来ないと落ち着かない」と言っていたが、こういうところが学校の魅力だし、そういう感覚を持つところから成長が始まるのではと思いました。

授業では生徒が「先生、先生」と異様な盛り上がりを見せていた時がありました。最初は「イタイ」と思うこともありましたが、彼らは小学校などで先生に甘えたことが無く、楽しい先生体験をしていなかったのです。だからこそ、今この瞬間彼らは凄く楽しいのだらうなと思えたのです。

先生達は今までの経験を活かして、生徒を育てるためのシステムを作りあげていました。

1年生では授業に出なくても学校へ来る習慣を付け、人との関わりを作るために見守る。すると2年生では行事などをきっかけに関係がしっかり出来て授業に向かう姿勢が出来てくる。生徒をどう育てるかという過程で、行事を生徒に自主的に取り組ませることで生徒が変わる。また「生徒を語る会」という研修会を月に一回開いて生徒の情報を提示したり、何かあった時に頭ごなしに怒るのではなくその背景に何かあったのだらうと考え、それに基づいてそれぞれの生徒と接していました。



太田直子監督

卒業生や保護者もよく学校に来ていました。映画の内容とは関係ないですが、学校の空き教室で保護者が集まってウサギの絵を描いていた。それはPTAの絵画教室でした。この場面的ように、生徒達の親が楽しそうでした。この学校に救われた」という生徒は多いですが、親もそういう人が多かったです。年に1回PTA主催の「わが子を語る会」という集いがあった、毎回持ち回りで講師を決めてそれぞれ保護者の中から話す人を決めて自分の子供の感想・課題を言います。そこで自分が話したり、話を聞きながら涙する人もいます。文化祭で歌声喫茶で出店するなど、自分の子供以外の生徒とも交流があるので、「生徒みんなが自分の子供」という気持ちで接している人もいます。

卒業生も（生徒・保護者・卒業生・教員が集まる）4者協議会で集まって学校を活性化させるための話し合いに参加します。文化祭で出店したり、授業で保護者や生徒に色々話をしたり、先生の所に遊びや相談をしに来ます。修学旅行にも自腹で参加する人もいましたね。

学校だけでなく先生と生徒だけでなく、近所の大人がいたり、お兄さん・お姉さんみたいな先輩がいたり、給食のおばさんがいたり、私のような外部から来た人が出入りしていたり。浦商はそういうコミュニティーとしての役割を果たしていたと思います。

Q「色々な事情を抱えている生徒がいて良かった」とインタビューで答えていらっしやいましたか？

不幸を背負ってという意味ではなく、様々な生徒がいて（引きこもり、元ヤンキー、親から虐待を受けていたなど）それぞれに背景があった。同じような体験をした生徒だけではなく、お互いに影響を受け合っていた。

社会に出たら水と油で付き合うことはしないが、学校だから同じクラスだからいやがおうにも色んな生徒に目が届くし、あの子はどうしてあんなのかな？と気を掛けるようになる。それが彼らの成長にとって良かったと思います。

Q 撮影をする上でどういうところに気をつけましたか？

元々統廃合の話があり、それを止めるためのひとつの手段として学校の撮影をしていました。そのため早く主人公を見つけて、その主人公が変わる姿を撮影して、こういう学校があるということをも早く社会に出したかった。最初の半年くらいは非常に焦っていました。そんな気持ちが伝わってしまったのか、先生には「そんなに焦っても生徒は変わらないし、そういう姿勢は良くない」と言われました。それまでは先生と一緒に生徒と接している感覚があったのですが、撮る姿勢を考え直しました。

部外者なので先生のように生徒達に注意をする権限もないし、友達のようにベタベタとする関係でもない。だから彼らを見守り、何か困った時には手助けをする。そういう距離間をどうにか考えました。撮影の時は、このようにその都度立ち止まり反省ということの繰り返しでした。大変でしたが今思えば楽しい思い出ですね。

Q タイトルはどのように考えたのですか？

月あかりしかない暗い中を歩くと、校舎からうつ

すらと明かりが漏れていて、そこだけ明るくてみんなの声が聞こえてきてホッとします。夜の学校にはそういうイメージがあったので、月あかりという単語が閃きました。

Q 映画にして良かったと思うことは何ですか？

出てくる生徒はこの映画で、イタイ 自分をさらしています。そんな過去を受け止める過程で、生徒は（その頃を思い出して）つらい思いをしたり傷ついたりするのでは？という不安がありました。

8月21日に生徒のナオミとサチコが東中野に来てくれてトークをしたのですが、サチコは「（浦商は）見捨てない学校」「（この作品が）苦しんでいる人の励みになればいい」ナオミは「（この作品を）自分の子供が大きくなったら見せたい」と言ってくれました。彼女達は過去を乗り越え、そしてそれを振り返ることができ、強さを身に付けてくれたのだと感じました。そういう風に彼女達が映画を見てくれたことが嬉しかったですね。だから生徒達のためにも映画にして良かったのだと思います。

彼らが今後何か辛いことがあっても、このような状況から這い上がってきたんだ」という励みになれば良いですね。

Q 映画で伝えたいことはどんなことですか？

「学校とはどういう場所なのか？ 人間が育つ上で必要な環境はどういうものなのか？」というのを考えるきっかけになればと思います。「学校は生きる希望をくれる場所」と言った卒業生がいます。その言葉を聞いた後映像を通してそういう部分を伝えたいと感じました。こういう生徒がいた、こういう場所があったということを感じて欲しいですね。



浦商とは？

1941年に創立された定時制課程の伝統校。

埼玉県教育委員会が、現状の夜間定時制高校33校を2013年度には13校程度に減らす計画を立ち上げ、周辺の夜間定時制高校3校（与野、蕨、浦和商业）を2005年度募集停止にすることを2001年に発表。そのために2008年の統廃合でその歴史を閉じた。

映画に出てくる生徒達のように、引きこもりや元ヤンキーであったり、いじめ・親の暴力・リストカットなどを経験している生徒も多く入学してくる。そのようにどこも行き場の無い生徒を受け入れ、今までに3400名以上の卒業生を社会に送り出した。

地元・埼玉県を中心に様々な活動をしている太鼓集団『響』は同校の太鼓部の卒業生で構成されている。



イベント・上映予定・問い合わせ先など

文化庁映画賞受賞記念上映会

会場：シネマート六本木スクリーン1

住所：東京都港区六本木3-8-15

日時：10月24日（日）11：00 入場無料

TEL：03-5413-7711

シネマスコーレ

住所：愛知県名古屋市中村区椿町8-12 アートビル1F

日時：10月16日（土）～22日（金） 14：45～16：40

10月23日（土）～29日（金） 15：00～16：55

TEL：052-452-6036



定時制とは？

1948年「すべて国民は、ひとしく、その能力に応ずる教育を受ける機会を与えられなければならない」という教育の機会均等の精神に基づき、様々な理由で全日制の高校に進めない若者に対し、高等学校の教育を受ける機会を与えるために誕生。

現在は浦商のように統廃合の為に無くなっていくなど学校数は縮小傾向にある。その一方で、昼間働いて夜勉強するという特徴から、不況による家庭の経済的負担を軽減させるために定時制への入学希望者が増加。入学のための倍率が上がるなど、本当に定時制で学ばなければならない生徒が入学出来ないという問題も抱えている。

「月あかりの下で」公式HP

URL：<http://tsuki-akari.com>

問い合わせ先

株式会社グループ現代 担当者：猿田（さるた）迄

住所：東京都新宿区新宿1-11-13 トラスト新宿ビル4F

TEL：03-3341-2863 FAX：03-3341-2874

URL：<http://www.g-gendai.co.jp>

MAIL：yus@g-gendai.co.jp

写真提供：株式会社グループ現代